

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 盧 銀美

論 文 題 目

映像を語る声——1930年代から1950年代の日本映画における
ヴォイス・オーバー

論文審査担当者

主査	名古屋大学 教授	藤木 秀朗
委員	名古屋大学 教授	齋藤 文俊
委員	名古屋大学 准教授	小川 翔太
委員	関西大学 教授	笹川 慶子

論文審査の結果の要旨

〔本論文の概要〕

本論文は、1930年代から50年代にかけての日本映画において、映像に声をかぶせるヴォイス・オーバーという技法がどのように導入され、どのように使用されてきたのかを考察したものである。同時代の雑誌記事、書籍などの言説を広く渉猟しつつ、現在も残存している映画を事例にテキスト分析を詳細に行うことで、ヴォイス・オーバーの導入と展開を実証的に論証している。

本論文は、5章からなる本論に序章と終章を加えた構成からなっている。序章でヴォイス・オーバーに関する最新の理論を考察しながら本論文のアプローチを設定した後で、第1章では、サイレント映画からトーキー映画に移行する1930年代前半に、当初は映像と声を同期させようとする「同時性」へのこだわりが強く見られていたのに対して、次第にそれに必ずしもこだわることなく多様な組み合わせを探る動きが現れ、この動向に沿う形でヴォイス・オーバーが使用されるようになった経緯を明らかにしている。第2章では、トーキー映画が定着した1935年頃に、当時の言葉で言う「ナラタージュ」という技法が使用され始めたことに注目し、これが過去の経験をもとに、感情を伴いながら内面を語る登場人物のヴォイス・オーバーとして機能していたことを実証している。第3章では、1930年代に興隆した、二元論的な道德観とそれをめぐる葛藤の表現を特徴とするメロドラマ的モードに規定された映画作品群を取り上げ、それらの映画作品でヴォイス・オーバーが登場人物の内面の葛藤を表現する技法として効果を発揮するようになっていた様相を浮かび上がらせている。この技法は、当時「独白」という映画専門用語として概念化されていたことにも言及している。第4章では、1930年代後半から40年代前半にかけて製作された戦意昂揚映画を俎上に載せ、この種の映画では全般的にヴォイス・オーバーを採用している作品が少ない一方で、『ハワイ・マレー沖海戦』（1942年）、『愛機南へ飛ぶ』（1943年）では個人的な葛藤を克服して国家に献身する人物へと「成長」していく過程を描く際にヴォイス・オーバーが使用されていることを詳らかにしている。総力戦の時期、メロドラマ的な映画は軟弱な精神を描くものとして批判の対象にされることが多かったが、その一方でメロドラマ的なヴォイス・オーバーが戦意昂揚映画に採用されることがあったことを示唆している。第5章では、「反戦映画」として知られる1950年製作の『また逢う日まで』を中心的な事例に取り上げ、ここではヴォイス・オーバーが戦中の経験を、戦後の道徳的観点から感情を込めて語るものとして使用され、それが反戦意識を高めるイデオロギー装置として機能していたことを明らかにしている。

終章では、結論として、ヴォイス・オーバーが歴史的な文脈によって異なる特徴を持ってきたこと、初期のヴォイス・オーバーが特別な技法として受け止められていたこと、そして総じてメロドラマ的モードとの関係が深かったことを指摘している。

論文審査の結果の要旨

〔本論文の評価〕

近年の映像研究では、従来の視覚中心の研究に対して、身体感覚、情動、そして聴覚の観点から映像を捉え直す動向が顕著になってきている。本論文は、こうした全般的な研究動向に傾倒しつつ、ヴォイス・オーヴァーというこれまであまり研究の対象にされてこなかった技法を歴史的に仔細に考察することで、とりわけ次の3点で映像研究に新しい知見を示しているものとして評価できる。

第1に、ヴォイス・オーヴァーに関する従来の研究が理論に偏りがちだったのに対して、本論文はそれを歴史的な事象として捉え直すことに成功している。従来のヴォイス・オーヴァーの研究では、一人称・二人称・三人称といった文学的概念を安易に適用するものは少なくなってきたものの、欧米産の映画を事例にどの作品にも普遍的に当てはまるようなヴォイス・オーヴァーの機能をモデル化する試みが多かった。それに対して本論文は、そうした理論を、方法論的枠組みを独自に構築する際に参照しつつも、サイレントからサウンドへと移行する1930年代から50年代の日本映画という特定の歴史的文脈に即して、ヴォイス・オーヴァーの成り立ちと展開を明らかにしている。第2に本論文は、日本映画についてはほとんど研究されてこなかったヴォイス・オーヴァーの歴史を検証することで、日本映画史の研究に貢献している。近年、日本映画史研究では、多数の研究者が弁士、アメリカ映画の影響、サウンド技術、映画館の上映形態などの観点からトーキーへの移行の問題に取り組んできているが、ヴォイス・オーヴァーについてはほとんど触れていないのが現状である。これに対して、本研究は、同時代の言説と映画作品の両方を検証することで、ヴォイス・オーヴァーがトーキーへの移行という歴史的文脈の中で、一つの特別な技法として確立されようとしていた様相を浮かび上がらせている。そして第3に本論文は、ヴォイス・オーヴァーを単に技法上ないしは作品形式上の問題にとどまらず、文化史的・社会史的問題としても論じている点で、広い視野をもつ研究として評価できる。1930年代中頃に顕著になったメロドラマ的なモードを基調にするヴォイス・オーヴァーが、メロドラマを表向きには否定していた戦意高揚映画にも採用され、さらには登場人物の個人的な声を通して戦中の記憶を感情的に喚起する戦後の反戦映画にも使用され続けていたことを具体的に明らかにしたところは、その端的な例だと言える。

とはいえ、本論文にも問題がないわけではない。例えば、メロドラマやリアリズム、あるいは日本映画に影響をもたらしたというアメリカ映画に関する最新の研究成果についての知識と理解が不足しているために、ときとして考察が浅く、記述が精確ではないと感じられるところがある。とはいえ、こうした問題は今後の課題として十分に克服していくことが期待できるものであり、本論文全体の価値を損なうものではない。

以上により、審査委員一同、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断した。